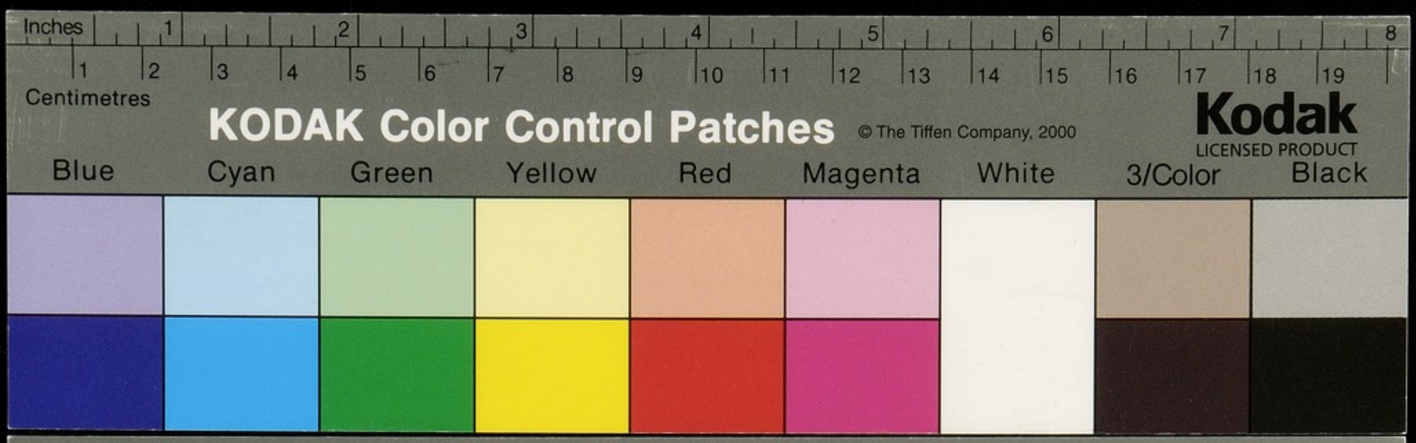
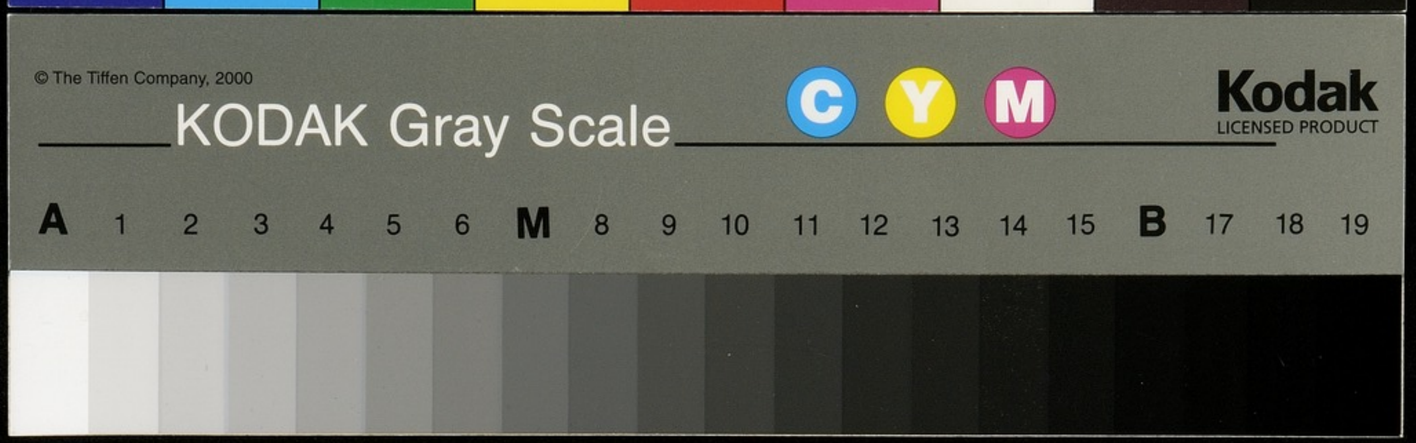

Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black


© The Tiffen Company, 2000
KODAK Gray Scale
C
Y
M
Kodak
LICENSED PRODUCT
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19


0
50
100
150
200


新鐫
椿説弓張月
鐫
編
巻之三

『椿説弓張月』続編巻三

東都 曲亭主人編次

第三十五回

真鶴孝烈北谷へ赴く
國典勇敢阿公を拉ぐ

毛國典ハ寧王女廉夫人を諫まつらせ。ゆくゆく首里の王宮へまかりて。真鶴が忠孝を詳かに述べあげ。彼なりくと。幾とせんこゝろを請なぐさめしかば。尚寧王これを笑ひ。くそゝのかしてぞ嘆賞し。これ寧王女を幾ふべくそゝのかしてぞ嘆賞し。これ寧王女を幾ふ民の父母として。これを救ふのみはしるけれども。おのれ王女を既に中城と稱せられたる世子ぞう。今彼を害して。國の患を除んも。譬をりて兩を避るがごとし。後世の譏論を脫れ難くて。不德の君といふべければ。司馬順德が女児真鶴とやうん這般

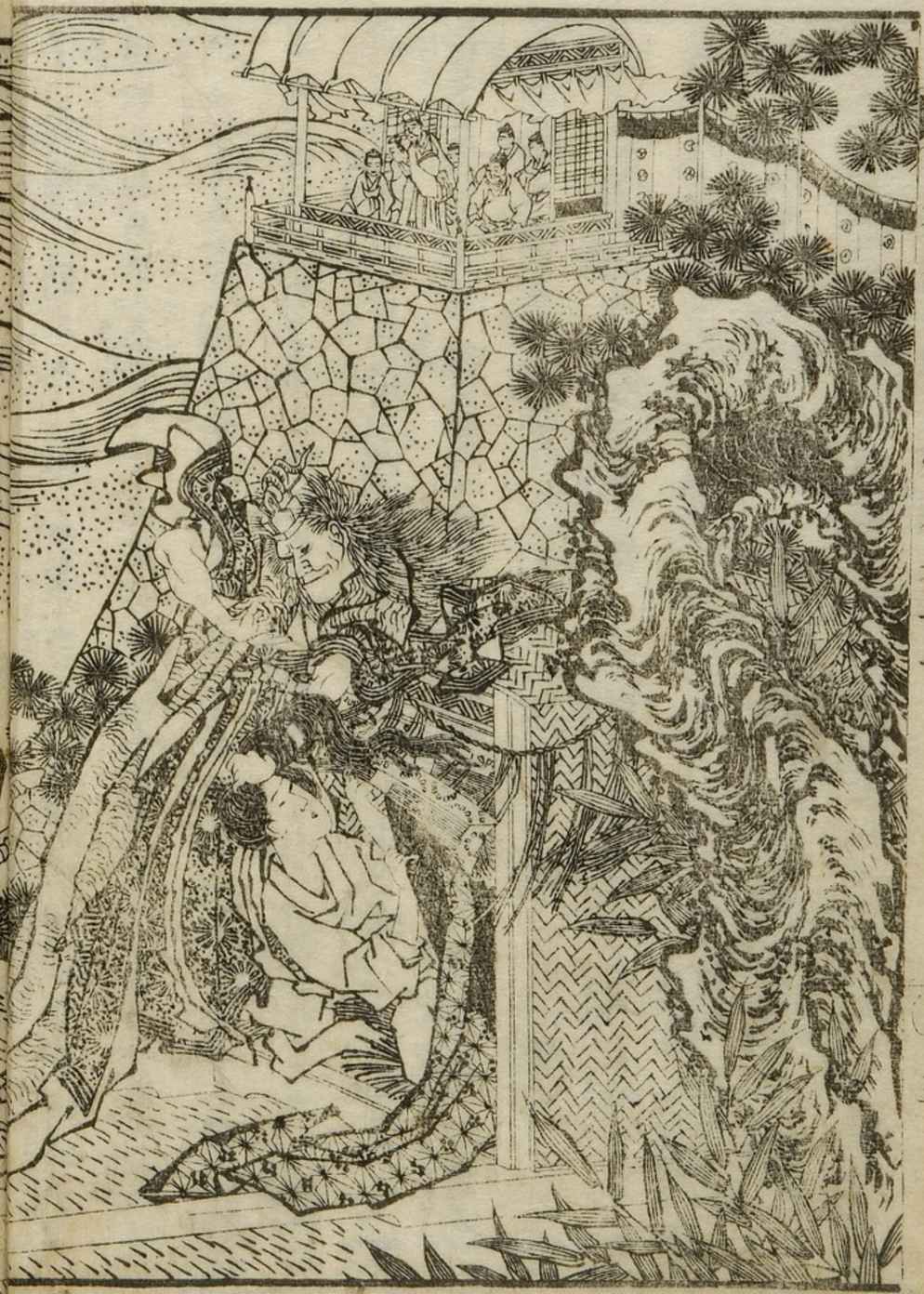
の募よ免じて。まゐる志いと賞そべし。彼が父順徳ゝそ。世ゐ愛ゝ尼忠臣なりしな。ゐし悩りて誅せしる。久しくこと以後悔を。ろれを赤その女児をさん猿として海底ゐ投んる。不便ゐおりへど。そゐ彼が本茅の情願なるに。それもむろの少女を惜さく。千万人ゐゐ掏ざしより て真鶴が忠孝ゐ賞し即命婦として。猿ゐ北谷へ赴ー父順徳ゐ。後一品准國陽男と贈官ー母章氏ゐ。保國夫人と追封そべしこの昔よりしくいひあくせよと叮嚀ゐ仰そるあそ。毛國典そ。依然として命を稟。忙ーく中城ゐ退りて。仰の趣以速ーぐ。廉夫人寧王女をさふおり。真鶴そ。そじめて天日以瞻こらしつ。首里の方ゐ向ひよー。君恩以拜謝ー。今ハおりひ遠るゐしとて。るるーゐ死を急ぎて。次の日より潔齋しー。猿ゐろ日以もろろれ。かくと独ゐ中婦君利勇ホそ。おりのゐ違ひさいと本意るくハおれど。縛既ゐ定りてハこれをいひ破るゐよしおくて。いよー廉夫人と毛國典をらぶせんのとしこと甚ーく再さ旅と謀畧もるること慟こて。もろろ肝膽を摧こそおそろーけ是。かくて尚寧王ハ。こゐらを北谷ゐ赴こ。君真物の諸神を祭ゐ。海邊ゐ赴た。まゐ話を猿としそ。君真物の諸神を祭ゐ。れ阿公が奇特以ろんとて。豚くと吉日以ト。こさて本日ゐもるりしかバ。三司官より。里之子。親雲上。筑登之ゐ至るまで。文武の官人戦おるー。北谷ゐ赴そるしーかバ。託女長阿公ハ。二十餘人の徒弟以従へ。浪打際ゐ壇を築た。壇の四隅ゐ注連引こしてこれを待。縛為体いと晴がほしくぞろえし。この日世ゐかくれあくざれバ。濱川。砂邊。野國。野里。玉代勢。屋良。桑江。嘉手納。平安山。

伊礼。前城の鄕人ホ。海辺ホ群集して王ヲ拜し。衆皆万歳と祝しまうして時剋ヲ違へず。中城の按司毛国興そ新命婦真鶴ホ。蕉布の淨衣ヲ被せて。白木の轎ホ乗し。鼓の轎夫ホ舁しつ。浦曲ちくふりし。国王既ホ出ますと聞て。轎を壇のほとりに扛おろさし。忙しくふれり。と笑えめざるホ。紫巾官利勇。仰もまことでそこに生擒の内をさし覗きつ。冷笑ひ。謀叛人の女児なれば。有のまゝ処なれまゝおこらるゝに漂泊し。せそ暖なれども膚寒く。手ホ豊なれども餓ホ苦しこゝろ私とゝヲ餓うめく。自殺せんよりハ。とそふかこそ。世ホ捨られし死物狂ひも附ヲ。忠孝の名を竊ミ。父順徳が叛逆の罪名ヲ削られ。剰例なき高位高官を贈らるゝ。その労

ま人。命婦の列ホ入ふれハ。常言ふしふ。悩の功名なり。阿公ぞく。這奴を投めく。奇特をこそせめと。阿公そ。五七人の託女ヲ招下てまふう。轎の右ホ立繞りて。めぐゆるに物見のヲ簾ヲあげ。老皺こゝろ乱れ臂を伸ぐく。真黒髪ヲ。ミづからと梱ぐく引出そ憐べし。真蛭そ。蝉髪肩ホふり乱まく。雪ホ拂ホ拗いごとく。紅顔砂ホ塗玉て。風ホ落る梅ホ似ぐり。ぐゝ期究し。奉なれバ。駭だゝれ色ヲ変も形ぐ。引ぐ隨ホ轉輾。その形勢孤雁の鷲ホ捕るゝ異ならぶ。これをこゝろの嘆息せざれハ好く。ある痛し。中城の卿命ホ代なり。國の患を禳除んと希ホ心操の世ホ勝れる。のこゝろで。容止も又愛し。かゝれ少女ヲ犠とし受ぐ。人ヤ



阿公北谷ヵ
水神



願奉ㇾ祝かうへまつる。神慮寔ㇾ測がたし。と呟きまつり。當下阿公ハ。
真榊をひきたて。海邊すまひより。且くにも秘文を唱。ゆがく
海面よ推向て。数十丈なれ崖の上より。突落さんとする処を。
毛國迚走りよりて忙しく押とゞめ。阿公ハ對てひざまづけるを夫
神そ哀愍を慮とし。人そ性命ハ尚りて本とす。されバ生とし活る
りの孰ㇾ念れを惜うざれ。ちるを今。人をりく職としてその
験なしとさいへ。その罪阿公がうへあり。神その犯をゆるしたまへ。
何をりく其許の悦を補ん。いと公がとゞ。と詰問ふ阿公ハ半
落ちる歯をあらはして。艱然とうち笑ひ。吾倘六十よ及ぶまで
國の祀ふ失りて。神の慮ハよくちりぬ。こゝ以て上國王より下士庶人
ふ至まで。公然として疑そ。ちる可おん名指を拄て。公がとゞ。と。

宜ふいうまでや。其の処放ちやれ。といひも果ぬ。ゆり落さんと。焦燥ぎ。
毛國閂ハなかとめられまつれ。君真物出現して。禍福吉凶を示し人面あるこれをころふ水神
より。君真物出現して。禍福吉凶を示し人面あるこれをころふ水神
血食ひ求むるの好ㇾ。なども。
且三十七の間切。三十六の属嶋いづれ王土ふあらざる。誰ㇾ王臣ふあら
ざる。ちるふつぶ君。駕ㇾ杜て。この海邊よ到来る人とも。水神ふ體を
顕して。そのおの主ㇾ祭るの鉄を述ざるハ。無礼あり是正ㇾ神ふ
ぞして五月蝿成邪神なるべし。阿公よく神のこゝろハ日今両三
人の徒弟を遣して神をうちに迎れる。いと易かりなん汝達ハいづく
や。と罵もあへぞ。はうちくく侍てる。二三人の生託女と忽地磯と
蹴ちらしつゝ真逆さまふ滾落ち。浪の底よぞ沈こそれ利勇こそ

こそ大に怒りこれ毛國將物ふやわふ筑登之ホゝどて這奴を搏ざるといきまきて指揮それバ毛國將眼を瞋らし阿公君父惑ふ婦女子ハ殊とをし其驗をもざるこれハ罪なき人を殺して君王の憤とある心ゝ小臣これやふが故ふ水神をこゝへ迎て祟を受ざるやや試んとを足を禁るのハ忠臣ふあらぶれ何の罪あつて傳を受べけやと嘯るその威勢ユ辟易して利勇が指揮ふ應ぜれどのみし國將又阿公をおさへまく既ふ生託女両三人を遣しるふ。水神いまだ出現せざるその返命ぞ怪ー阿公ゝゞかゝる波濤を披てこれを迎ゐバ彼神ゝゝふび推辭こと弥ゐじ君王ハねしもある不敬こゝゝゝゆれといそがして項髪会まとうい俛て突落さんとしふしハ阿公大ふ驚ゐ急ぐ戦慄つゝ掌を合ゝ吾倘実ハ海神のこゝろ弥もるふあらぶ年ゝ舊虹山ふる虹塚ふ祈ゝ不思議ふ一年中の吉凶をきるのこと人弥ゝ助けまくと勸解ふれバ毛國將さもこそ冷笑ひ聽ゝ真鶴を扶掖ゝ壇の辺ふゐりゝさて國王おまうけ阿公ふ奸計既ふ發顕ゝり今ようり人をりて撰としふふひとゝゝ彼ふ辰の年月日弥ゐれ女子弥募ゝ撰ゝ云多人ゝと勸もまうせしハぬりた討滅ありとおぼしてその詐謀を知られそハ君ふも曉ゐふふことを是彼をゆひあしてよゝと憚るきもなく夕えあぐるふ尚寧王点頭て今日のゆゑを毛國將ふりせバ忠孝比なた少女弥殺とのこゝろぶゝ人ふ徳を損ふて民の望弥失ふバし嗚呼危きかな阿公ハその罪者ゞた

癖者なれど女流なるゆゑべ。死刑一等を寛め師尊あるとともに追放をぜさる。
みそも。彼が虬塚の神を祈さく一年中の吉凶をさるとしのことを喜ざれ。
この後又鳴呼のものありて彼塚を祈らば。いよいよ不思議をいひふらし
て愚民を惑さんも量ざし。綽の叙ふこれこそら彼山を攀登りて。
件の塚を發せやとぞふなり。宜へば毛國將又さうひやう彼虬塚
を往古天孫氏虬を伐さ民の害を除ぞ骨を高嶺の山麓を埋め。石
を建松を植さ標としるせ古迹ゆゑ高嶺の一名ぞ舊虬山と喚
ぶともこのゆゑしをいふれお阿公が浮しる一言ぞ信じて虬塚を發せる
なる。究めてこそよなゆゑべ。君王願くハ徳を修め民を憐こそ天つ
災を攘ひ聖王の世ぶ悪民なし。君仁義をりて民お教るぞ。
虬塚ありとも誰が阿公が墳を闢さ怪しを行ひをしのべとぞ。理

を盡して諫さり。尚寧王はくぐと
彼を暁りてこれお暁らざ改を左右ぶうち
なり。淫祠を俗ぶ害あり。虬塚ぶ何の神靈うめるん。今これお發廃
ざん。後ろのゝび奸を助さ。毒を流さぶ至るべし。ゝゐ既ぶ決せり。
ゆゑゝび諫ることなれ。真鶴ハ。命婦ゝう。彼をゞ中城あるてかゝう
て。寧王女ぶ給事させよ。けゐ日もてや傾ぬね。翌又つとめて。舊虬山ぶ
登るべしぶ。郷等その旨意ぶ伝へよ。是彼ぶ先ゑゝし。遂ぶ首里
ふゆりのふかゝて毛國將ぶ親雲上の武官ぶ仰を傳さ。阿公師孝
を追放ぃし。真鶴を伴ひさ。中城へ帰るぁぞ。利勇ハもぐゝ謀な
ゐ為損じてこそうの中ぶ集燥ぞもも。阿公ぶ救んとせゞ。おのが伎倆乃
發顯んと。防ぐ毛國將と爭ひ戦ぞ。阿公ハいと恨げぁ。追ひそ


毛國興勇敢
真鶴を
殺ス


林詩音弘月綱等

られて利勇ならず。苦しを舐りし唖子のごとく。いろんとすれどいひかねく。只喃くと呟くのこ。善悪邪正財至りて。四條ゐ分れ北谷は。孝女が績世くゐ傳て。傳信録巻の四ゐ。昔北谷ゐれを漏溪ゐ惡蛟あり。風雨を興して患をなせ。王國中に令く童女ゐ募狩としてこれを祭るゐ。宜野湾なれ章氏の女児。眞鶴と呼るゝが。募よ應じ刃ゐ捨てく母を養んとせし至孝を。天神感應ありて蛟を滅し害を除。封爵を受ろう。と書ある世いろのなゝん。その説大同小異ゐつく。或ゐ美我本在住の時とそ。いまご何が是ろゞ。

第三十六回

尚寧王腰輿高嶺ゐ登れ
舊虬山の古墳曠雲ゐ現ぞ

却説尚寧王を毛國掛ゐ練ゐれ発廢んとそ。次の日又

新編ふ旧虬山の飛架山のゐ経ゐありとある三方圖會ゐ載せるゐの圖説ゐ誤多し今傳信録ゐ因て改正を旧ゐ琉球ゐ鳴岐談ゐ參考人の使録ゐ辨ゐ云云。

利勇ホ以下の近臣ゐ引従し。高嶺を登くゐ出ゐそもろゐ嶺ゐ間三里ゐあり。東北を八頭山ゐ続く高く白雲翠微を遮りく。向上見べ岩嵓ろう。正南ゐ蒼海杳渺としく。高浪却連山のごとく。直下ゐ溟漲あり。麓ゐ二ッの泉ありて。恵泉と呼び芳泉と稱ふ。泉のほとりに石橋あり。是を大里橋と号く。東南ゐ又山あり。圍古山これあり。大城。真栄里。ゐ屋姑と呼えしい高嶺の麓村なり。羊腸とれ山路をけ少けゐ。風ゐ排ふ柔未の露を天ゐ霑ふ。且ね雨うと疑ひ。ゐちどくれ木下圍ゐ明ゐも知ぬ夜陰ゐ似ろり。圍任の腰輿ゐゐ太母ゐなれ綱を著轎丁ホくほとくほを組あいしい登る行ふ。近臣そ葛藤蔓ゐ攀乃ちて喘く相従ふ。からしして虬塚の

ほうりにたぐり著。たひふでされ樹下ゟ禦冬杜居く。文武の官人左右ゟ跼蹐し。君臣おのく仰く。件の塚を「人皇」ハ鬣松天をかそえく。龍蛇の勢あり。石碣地ゟ埋まて。虎豹の臥せれがごとし。いく星霜を経くるまん。そる人をしてそのとき利勇ハ夥の人夫ゟ指揮して。こゝゝ発けといそがせ。人夫ホいまふく鋤鍬をもて。石碣掘起そる。二晌あまりほて。やうやく石碣を押倒し。赤松の下を掘穿ゟ。多く茯苓ハ汲そう。とかくして深一丈あまりに及びて。石の唐櫃ゟ掘當そりし。忽然として。物のあとかたもなし。こゝに至て君臣大吉土中ゟ何をか獲ん。玲瓏として金鈴を振がごとし。こゝに至て君臣大ゟ怪をあれや何ぞと耳ゟ側て。怕まく。さしも恥給べ。人夫ホハ懈怠を投捨つ。走り退きて忙然そう。浩怨ゟ毛國將を君王を諫んとて。後走ゟ推くふ。「日今この景迹をそんく。禦ゟ尚寧王小臣が諫を用ゐざるぞ。遂ゟこの虬塚を發せたるゆえら。怪異そ出ゟあそう。往古天孫氏。此高嶺ゟ虬塚ハ築せ。又小琉球一名大嶋ゟ。赤瀬の碑を立く。妖魔を鎮めまひしより以来。千載の今ゟ至れまで。國家不朽の古蹟そう。ゑそれを故ゟく發せまふ。寃ハ走ふし禍を醸して。後ゟ悔そも及びまひ。只この俚ゟ土ハ覆ひ。舊のごとく埋ーゟ人。古塚ハ發くゝ。山賊の所行そう。まほして崇ゟくそも。世の為ゟ益なく。民の為ゟ害あり。千慮の一失ハ。聖斷その意をなぐさめと理ハ竭して練ーくべ。尚寧王中後悔の氣色ゟて。ゑし默然としてく在それを。いひがひしと嗟ハて。利勇すゝみ出く声を励ー。毛國將過言なり。こゝ君をりて山賊ゟ比を。不敬の罪禁めんそあれをかくぞ。

舊虬山より尚寧王古塚を發く

殿下もし土中の鈴の音ふ怕ぢてく櫃の蓋ふ開けるそこの儘ふもちく止めるで。國民隨弱の君なりと悔ゆるぞ。是よりして救くりのもありぬん。一尺の土地も。無用の古塚ふ塞るへ國の費なり。これを廢しるのことぞ。賢王とゆまうもそくる且。いうぞ劍鏡の遺物ふ奪んるふ。墓を發く奸賊と。日ひ同じて語るぞ。猶豫しるの事うかとあざみ笑へへ。尚寧王こ且ふ励されて大ふ怒り。毛國興をそくく女じれて諫言して。君臣の礼儀を乱れ。不敬とやいりん。玄礼とやいりん。其処の退ぞや。といひされまあを。毛國興へ。近臣ろりぬく押隔。さまくにいひ諭しつ。遂後方ふ居ろり。利勇へられふちうふ私もるく。勢ひ猛く人夫ふ催促。そく石櫃を掘出せと指揮されぞも。人夫ふへ恐も驚せぞく。互ふ面ひあひしは。

逡巡して去もあぐふ次。利勇勃然として劍を引提王車蓋こそ」。汝ホとし仰ふ叛ぐぞ。まづ首ふ刎くぞ。後ようみ穴に埋人目今首を刎ちおくと土中の櫃を引揚ると。何う至ほしれ。恐せよとぞ責ろる。人夫ホへかくく逼てれてせんそべ。太ひ麻索を。十條あまりふ繰おろして。櫃を縦横ふ括著。さて車轅ひて巻揚んとするふ。其ろ經ひる毛のごく。労せどして引出とれて。金鈴の音へふ鳴も止ぞ。この石の唐櫃そ。五尺四面面ひして。重さいくぞくとも量がこさを。輒くは揚られが。いよく怪しくく。恒れく蓋を開くその時。利勇この形勢ふ見こ大ふ怒り。ひのぞもなどて躊躇せれ。蓋を開といそぐれ。騰太ひ壮佼八九人立かりて。蓋ふ開んとて。石櫃ふよかられで。忽地百千の霹靂の一度ま落るごとく音して。石の唐

擲刺こころと碎死。その石八方へ散乱そこりしうば矢庭おうち仆
そこりの二三十人ま足ま折ら。膞を傷ら。半身鮮血ま塗れ
ざれいるし。こハ正ろまあらびとて。近臣ねの〳〵腰輿ま守護し戟を
執。弓箭ま携。とせよかくせよと散動あぞ。利勇いたじめの勢ひ
脱く。忙然としてせんそをもて君臣。ゆうめくに神を結め。
睛ま定めて。碎ら。擲ま見るお一朶の叢雲。醸疑雝としてた昇
て。あがて地上ま立そこと。こえ奇なれう。隆準骨法ら。異
人香染の法衣の。膚断離ら。れ被そ。ま。あハ錯ら。金冠を極
りち。底石の上ま結跏趺せせり。その骨相眉白く。脣赤く。髯を
黄みして面黒く。爪書くして指ま半し。肉脱そくハ。雪の松の骨を見
膚垢つてハ。両の竹の節も撓めり。人うとこを見べ人あもめらびた鬼

とこれば鬼あもあらび。衆人まこと怪こそくこそもいうあと斗り
に。うち覩こそ居こりれ。時ふ異人ま伸して閉ら。眼を洞と開
くふ瞳の光人ま射こ。尤ま右ま左ま見こりつ。

天公未生我　冥冥無所知　天公忽生我
生我復何爲　無衣遺我寒　無食給我饑
還爾天公我　還我未生時

と吟じ果て。呵こうち笑へば。利勇ま対ひ。大王の仰
あり。そも汝そ何のぞと問ま。異人ハ利勇に恵ぜそ。腰輿の物見
ねさし訳てつまうけ。殿下怪こそふことなれ。西方ふ聖人あり。
よく衆生を済度して。若ハ脱楽ハあふをなうちこれを佛と号
ふ東方ふ聖人あり。よく凡夫を哀憐して福を授渇を救ふ死

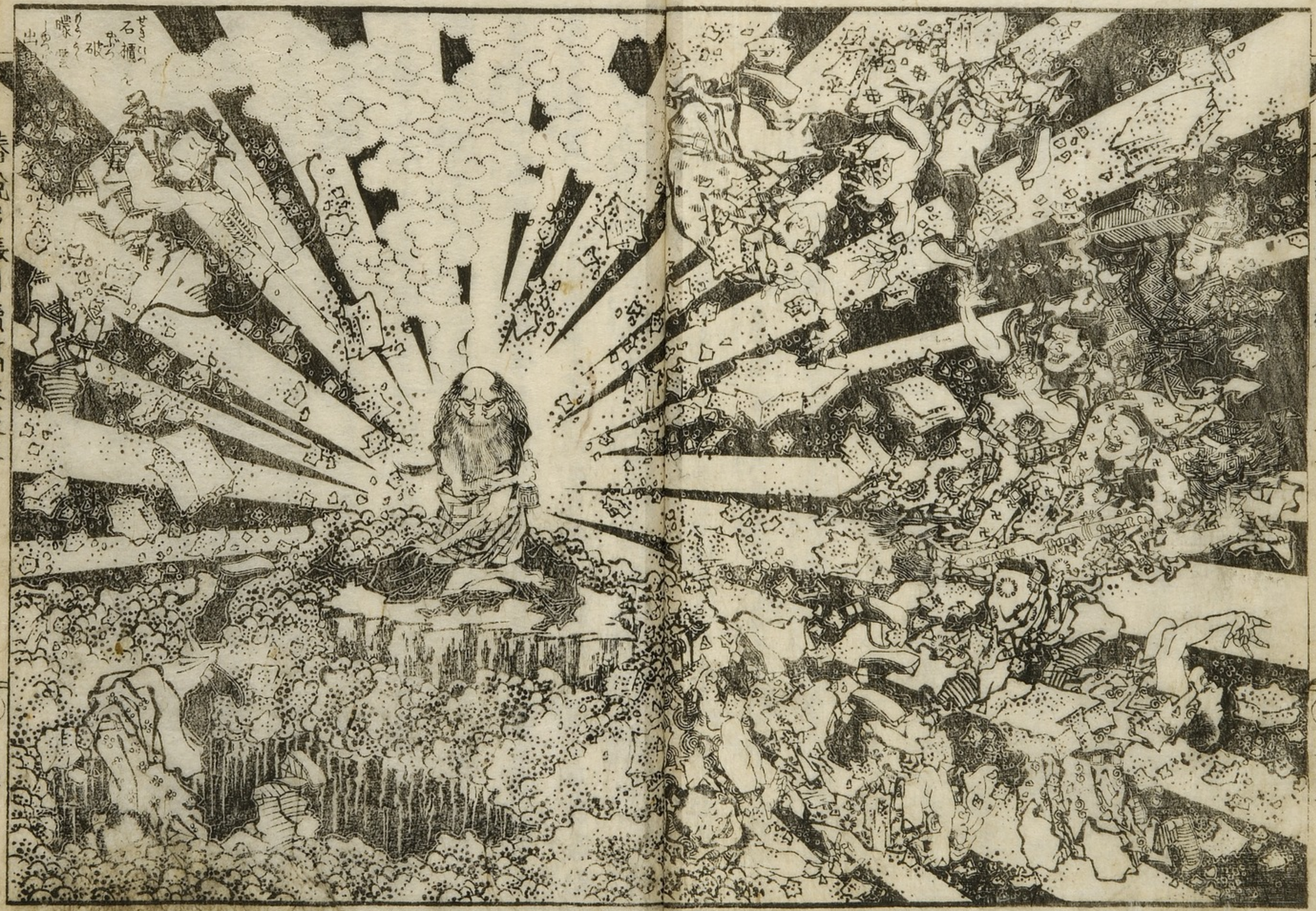
てたゞれが故ぉこれを神と称ぇ亦中央ユ聖人あり。真を修め壽を保ち天地とともに滅ぜず幸ねしそるからこれを仙と号ぐ。ゐが道這個の三を撰く。神通出没不可思議なり。これ風爾の比ぁう。この山中ぉ塾りて。一万八千載ぉ経ぬ。天孫氏九五主。いまぐ君がごとき賢王をあふざりれ。ことば仁政国中ぉ洽澤し。ゐが出べき時至れり。貧道當初天孫氏ぉ約諾し光を墳塋の中ぉ瘞てなげく乱の悪夫ハ只その虬塚なれるをを知らく。実ハ神仙の嵐ぇるはしぉ覚らざ。殿下猶疑のこゝろなくて。篤くこれ信しまふ。貧道今より政を輔ん。ちゝぶ王の壽命天地そ〳〵もぉ等しく。國豊ぉ民安うぐべしかくハ験をえるぇといひもあへず。因縛そく咒文を念じ。

唵毒婆蛇寧吽莎賀

と唱ふべ。石ぉ打ちくだくる人夫そも立地ぉ別ぉ起し。ゐ足ぉ傷こともなく。本のごくになりぬ。尚寧王ハこの奇特をこゝく忽地ぉ信を起し。腰輿の内より躍び出。神仙ねがつくハ。それを捨ぎして。教ぉ垂よといふぉ利勇る拝し以下の近臣ハそれ至れり。人夫そも至れり。或ハ呆ぇ或ハ畏こ首を叩くる信し。これ神仙ぉ同ぇ。流ぉ授世ぉ嗣ぐ。九五代の今ぉ當てかゝれ神仙の出現しぉ所ぉして。万民の洪福なり。欵び奉ること斯のごとし。と祝ぎまふせば。尚寧王満面ぉ笑ぇを含く。又異人ぇ對ひ。神仙腰輿ぉ並つらねて首里ぉ来臨あるべし。清浄の

土地をえらびて。道場を建立し。住寺せさし進らそべーとて。叮嚀
ふ誘引み。異人改をうち掉さ。それハ穢土火宅を厭ふがもろふこ
山ハ出るみを欲ど。王り求のふるみなのふび招さのなどさも。一瞬
ふこあれべーとて推辞しかべ。尚寧王只顧み稱嘆し。山居のみ
かのともかくもこ紙ふ仕しみ人。神仙の道号ハ志ふび再て使
ハ遣して。安否ハ問んとそれとふ。何をりて稱そべさと問べ。異人
答さく。貧道原来氏もなく。名もなふび霞ハ飲と雨ふ浴し。雲
をりて家とし。又雲ハかりて饑とせん。志れバ今より曚雲と呂し
ま人とそうけまど。王応さく。利勇ふハえそう。郷ふ今より異人
を仰さく。曚雲国師とそる稱せよ。それもし毛国將が練を用ひて
虬塚を發ひさこの神仙ふ値遇せんやさまめふびや。とほそう

うに。毛国將を尻目ふうけ。又曚雲を拝しけり。志れども国將ハ。
露ぢうも曚雲ハそる敬せざそ。只嘆息してゆざれが如し。この時日
影西ふ傾て。山を暗くなりにたれが。毛国將声ハあり主殿下の列
ませでうかくて忙されて。それや暮うんとしふまも路次のほどもおぼつほ。
近習官。などてハえあげざれと。ほぐれハ曚雲も又いふこのこの
処そ山又山ふ続きて。猛獣蛇蝎の患なきほしもろねふ。貴人
久ーく留てまのべかぶび。貧道明日首里ふこふりて。国恩を謝し
まうけざびしとそぐよ。尚寧王ハ已ことハ志ぢ。
曚雲ハ別を告。ふ日再會ハ志ぢはく。遂ふ腰輿ふ乗られで。
近習里之子。親雲上。志ぢとし前よ立後ふ後ひ人夫ふも暇ふろ
て。こるりろそも仮山を下れふ。利勇ハ少しり下て。そび曚雲



を伏拜ミ囚りと馬ゟ跡てちづうゟ後陣おうくせけれ。その中ゟ毛
國押そゝ所あれが山の半腹ようそくゝ。樹間を走遶り
ほゞ半弓ゟ征矢ゟ刈ひ。前ごろ斗量て鬼ひやるに。曚雲そ
の日ともあぐらび。蒼の所ゟ端せして。声細ゟ讀経ちつ毛国押
へこれゟえゝく。編ゟ絞び。満月のごく弊固め。弦音高く響と
發せば。怪ゝいろ引ハ三段みわきと折と。箭ハいさづゝよ地上
ゟ落ゝく。ねゝハ真逆さまゟ引仆されしのよるて巔より。滾落
滾流と墮る行ゟ膝を揺傷う胸を打昏絶ゝく叢の中にあり。
この夕。毛國押が妻新垣と夫のゆう来ざる斗。不審と。奴隷二三
人を首里へとて遣そゟ。こゝのつのごも鬱ゟ國押が倶したる家隷
ゟ行あゝ高嶺の半腹ゟて主をえうしなひ。彼此を索るよしを笑
て。さてハ首里へハくふりのゝじ。是彼うちつれざら。高嶺を投て
沙くほどに。その山の麓なる叢の中ゟ仆とされ人ありけり。一人
焦燥をあげてこれをえうみ。主の毛國押るりしうばと。こハいふも
うら驚ゝ慌忙つ。こゝるりろともに扶起して。さぬくゝまで勤とハ國押
ゟやゝに人ごちつれて。眼を睜て歯を切て。悲ゝたゝな君王小臣
が諫を用ひるらび。漫ゟ虹塚ゟ挙きて。悪魔を惹出ゟ人どもゟ足
足を曝ふびて。ゐる信志ゟあふこそ浅ましけれ。君臣既ゟ。彼妖僧ゟ
魅せられ見べ。國の危き事。累ゝされ鶏卵のごし朽をしや。妖僧
通力自在ゟして。孤忠いさぢふるとなりぬるよと。ふりごち忽地
奴隷ゟ衣えりて口ゟ紺が家隷脊をい捺り。こゝちいうゟ在ゝ。
彼ゟあん迎ふふりぬといふ毛國押うち点ゟれ持病の仏痛ゟり

そ。ゆくりなくもこの処より日代暮しよう。今そこやおこそり果つ。誘ふべしといひけて身を起し。家隷ふを扶掖れて丑三の比及ぶ中城へ帰りしが。落る時ふ胸を打ち。痛つよくして。寝食も生平ならず。毛國押が妻新垣いとなう負ふなる女なれば夫の病著ふ。いとなう苦しくて。次の日よう。処さの拝林ふ祈願しつ。琉球事畧ふいふ神。毎月ふ処くの拝林ふ云。馬琴按ずるふ拝林ハ神社のことゆや。ふく神の出現さべき処よ。神社を建おくをいふ。ゆえに樹を栽るのるれがし。古今集まねびふ神社を別と讀しるハ。ゆうかうふぶ邦ゆく神社をさのこころけんゆうそそれハなびきの森とうるらゐ。杜ハ日本の俗字ゆて社木の二字をあてたり。かれが琉球國ゆて神社を拝林と云ふもその義ハおるべしとゆや。因ふ蛇足の棒を添るのこ。ぼひ迎ふ。薬餌油断なく看病さる程どふ。十日あまり次の日。中城殿へまりしうば。寧王女毛國押が仏痛平愈せり。よりて次の日ふ毛國押小膝とすれば。廉夫人そぬうく訪ひ。病劇しとはメつれがいと仏ひとうくらひうれおふ。

おりしゆうハふそうしとそうく。蒙雲ゞるゆふらひ生ふく。母子眉根をよせ。近曽街の童謡ゆ

悪神来ゞ　白沙化蠏

と唄へり。是ふる蒙雲ゞるゆふ遊ゞ小臣ゆ死して。好ふくび君王を諫めまゐべしといふ。寧王女熟聴ふくいふ。衆人既ふ酔ぬ國押のとり醒ようとて。諫言その詮なう。ゆえに計妓ゆせんも量ゞじ。ふれが君のゐおもふ便宜をもふくいうる計妓ゆせんも君王ぞ。その身寃枉ゆ死して妻子ゆいくその数ゐをこえそれを不覚ふくふびや。湯をとりて沸ゆ止れハ労して功ふし。只後ゆうに禍を遁て。後人ぞふに謀ふれざる。准倣こそあゝまゐけまと説喩志ゆふ。

廉夫人も又さもあぐにいひ慰め。毛按司を召し不慮のやうあらば。王女ふハ何人ぞ傳ありと。何人をう便としまうん忍びがたを堪忍ぶが誠の忠臣うるべーとて。叮嚀ふふめえるひーかべ毛國押嗟嘆して仰みありひぬ。こと安うれと慈まうしつやがて首里へぞふくる。

第三十七回

毛國押寧王女珠を捧て龍宮城へ赴く

却説毛國押そ。當日中城殿を退りて直ぐ王宮へまゐり。病疾平愈のよしを申えあぐらの時尚寧王そ。龍宮城の正殿よ。利勇ホ以下の親方按司を集合。民の訟を聞せーに申口官薄冰掲さく。中城の按司毛國押くれり。とやうんふぞ。それ召せと仰そ玉ひて。毛國押うやくしく。陛を上りて平伏を。尚寧王こそ玉ひて。卿が病気ねとうう果しとゆえーかべ只今内官ホ仰て召さんべうおりひるふ。そやくもふれる事究さくはしやをや。小琉球なる。島北より訴まうひるものあり。その故ハ赤瀬の碑夜ふーー泣こと人の泣うぶとし。朝ホこと」を見ればー。碑面ある婦人の像ふ涙痕ありといへ。郷もごとく。件の碑ハ國祖天孫氏の建ふあとところはして。實ホ神作の古ものなるふよって先代頃灵異をあらいし時の吉凶ホ示せり。郷彼所ホ到ることて。縁の虚実を糺明ふそのうちいよ実ぞうらば。古例をしらべて。幣帛進ふし。祭礼を執行へうしと仔細ホ奏ありし。玉ふくハ毛國押頓首ちくーまうひる童謡を奏ぞ。つくん是彼ぞく。吉祥よもおぼえのうぞ妖ぞ徳ホ勝ぞとかや殿下。頃日街頭の不祥を暁ぞ。天命とおそれ

ゐるゝ奇代好このみこと成ぬれ苛政を省ず稅歛を寛くしよく
俊德を明はして善を勸め悪を懲らしめ妖怪立地ゟ銷鑠して
災害ゐうく仍るべくいたよく賢慮をめぐらされやとまち
そこ王宮ゟ退出ゟび中城殿ゟまゐりて寧王女廉夫人ゟ
王命の趣を告たまふ。さて真琉球ゟみいつの年ゟ。某今日頃のおん使を
うけたまはりて小琉球へ起行なり。彼処ゟ海上八十餘里しとしへども。
灘あれべ。舟行三日ゟいゆゑなし。ありれば路ゟ亦十
日ゞうも過ざるべしその間ゟ。おん身珠さま王女のはうへ
どしてよく給ふせまふ進らせまふ果子餅ゟのことをかる
かれ〳〵すゝめたまるべうふたゞおん身女子なれども。忠義我の志そ
丈夫ゟも勝まり。此ゟこゝろゟ秘て油斷ゟまふふると叮嚀ゟ教諭

次の日ゟ舟出して小琉球へ赴ぬる往ゟ尚寧王ゟ赤瀬の碑碑
のうへのとうく意ゟかれかゝこれを瞭雲ゟ問んと拠ゟまふ瞭雲
忽然として龍宮城ゟ琉球の王宮城龍宮城
を見さく。且怪ゟ且訝びいまこゝ發言せぶうゟ多ゟふ瞭雲先ゟ
毋うの殿下赤瀬の碑ゟこの人ども他の國ゟてゟかゝれこと
往くこれありむし夏桀の時ゟ兼山の石泣て山を走ふ赤修生公。
石ゟ集て虎丘ゟ説法ゟそれゟそゟの石こゝな点ゟとゝう或ゟ魏愉の
石よくゝのいたし周庭の石窮民を達せうさふゟ怪ゟもゟ足ゟびかく
てもなほ公ゟと好くゟそんありて琉球二顆の珠をゟて救禦ーのゟ
とまうせしかゟ尚寧王速ゟ諾ふたまふ。利勇ゟ中城へ遣ーのゟふし
かゞ利勇ゟ馬の足掻をそゟめつゝ世子府中城殿ゟまゐり寧王女ゟ

仰を俟ん。件の珠を進らせよ。それべしとのみ。王女ハ甚て真物と
珠の筥をとり出しつゝ。廉夫人ともに。これを利勇よ遍く一の人ハ
利勇左右のまゝ受捧て。王女おもらいに曰う。疑しきなるあハゆく
ど。この時あその梅やつうなし。封皮ハ披きてこゝそとて。さし戻せバ。
王女ふたゝび封皮を剪。紐を解蓋を開くに珠ハ口一顆
ありけり。こハいかにと慌忙。二重の箱を曲みるに反し。上袋をとり
揮ひるがへしつゝに。廉夫人真落ハりうとも。主従宝剣ゐ
走り入り。ゐる隈なく索れども。終に往方ハあれざりける。利勇そ
この景迹をうて。潜ゐ跡ひつと走り出。馬ゐうち騎疾うく
ゐ首里ゐ馳入りて。縷の起ハ詳まうと。尚寧王大ゐ驚ろき
二顆の珠ハ。天孫氏より相承して國家の重宝なり。ゐう然ハ寧王女
その一顆ハ失ひぬとも。今ハ後悔をりて。仕方ハあれ金とせんこハ
ゆゝしき越度なり。卿ふたゝび中城ゐ馳向ひ。王女廉夫人をおて来
よと。鳥嘴まなこハ利勇畏まつり。ゆくゝ汗馬ゐ鞭を鳴らし。中城殿
へ馳ゆきて。矢庭ゐ王女廉夫人を捕へ。張輿にうれ乗つ移ま
一顆の珠を携いそぎしくバ。中婦君ハ便宜
をゑうと。ゐびて。廉夫人。その一王女ゐ世と御せんとて。深ハ押隠し
なり。といへしうバ尚寧王ハ。怒りて。遂ゐ王女と廉夫人を高
嶺の麓。葛城の東なれ。荒磯へぞ配しける。このとき中城殿へ
給事せしものハ男女ハそこふまバ。或ハ殺され或ハ追放され辛ゐ
えざるハあうりけり。その中に真落ハ身ハ捨ゝ主ハ救ひとうを
おべうとひしバ。大厦の倒んとすれとゐおよゝ一木の柱べよあふ

ざれい意ふるゝびも中城を脱且去り。那覇の港口ふ程近き豊崎の浦家ふ牙ひ潜りて。毛国興が船ふ待ねこの時ゝも毛国興を。小琉球へ使ゝてそのゝふ管ざれば。利勇が奸智ふもこれを陥おとしなゝて。悪ふたてゝ牙ひ殺ろう。さそうえ毛国興ハ寧王女のうへ心ゝとなゝてく頻ふ紅人ふ牙ひいそがし。往年九日ほして那覇の港口へ著ふけれど真落これを待つけて。如此こゝれるのあり。と告れふ。国興牙もめんどふ大ふ驚れ。嗚呼寧王女。意示性怜悧ありもぜでも。遂ふ禍ゝを脱且ろうど悪人ぐゝが奸計ふ陥されるひねるよ。と痛しみ。且歎た且怒り。いうもして。中城へ入ゝをもゝべゝとて。そこはかうさま。肺肝を摧といへども。縛既ふ定りてゝいうもせんそべなし。憤を忍びく。首里ふ系止し。赤瀬の碑のゝ渕民ふがろうた

ふ違そようて形のごく幣帛牙ろう進ゝせ祭礼牙ろう行ひゆと牙ひえあげ。忙ゝく中城なれ。おのゞ茅宅ふ立ゆり。腹心の家隷ホを。さきぐふ打扮ゝて。遠外ふ。王女の配所を守護せさし又密ゆうに。真路を遣して。王女母子の衣食ろんど。よろづ念ゝかゝべ調ゝ進ゝせーろべ利勇がいくたびう。王女廉夫人を。くもれぞうしろうんとて。公ゞなゝ女人をかゝゝひ。その隙牙窺せーに。終ふ便を得ざゝてゝ。こゝろふ二年経り過ゝつ時ふ大日本。天皇近清院の御世淑を。久寿二年。鎮西八郎為朝ハ院宣ふよろく。曩ふ放ゝれ鶴の往方牙索ね。八町礫紀平次只一人をおゝく。遠く琉球国ふ推渡り。曚雲国師ふ行李ゝ奪ゐて。主従蓋虻山ふ索登り忽地麓ふ滾落て。廉夫人よ介抱せゝれをうゝべも。件の路を辿く大ふ飢び。乳母子須藤季重う。命を

捨てとり給へれ。大蛇の珠を。寧王女ふ与やゞて肥後へ帰りまひね。紀平治が私を逐つて。大洋を泅だ。鉄丸を推したるも。この時のみ。その前編第六回ふ。くはしくこゝに着けて。寧王女の傳。この條をゝでハ前編ふ漏より。故よその本末を巨細ふそるのこ。觀官事蹟の前後せしと。怪こゝろふことおゐれ。前ふまづ為朝の世家。三十餘年のみと録し。続編ふ至て。再て寧王女のみ就くはしく。そうなり。間話休題。寧王女廉蒙の為よ。おぢ〳〵自注を施こゝとおうなり。夫人ハ喪ひつる珠を求ん。ふう〳〵歎びふ折ふふ。真珠ありとそれが縁由ゆ物ごゝろて。毛國押ふ告しふふ。國押歓喜雀躍して。猛ふ王宮へ参上し。王女配処ふ於て。失ひつる珠をおのひつはしを求めおふ。尚寧王もさそが恩愛のみるうとおゝて。二年足ざれバうろたへふ。この折ふ氣矢をあはし。おうくバ王女廉夫人を召還そべしと仰するあぞ。毛國押欽然として。その夜もそゝふ。おん迎の用意をいたし。詰且轎を扛。夥の筑登之をおく。配所ふ赴き。王女母子のおハ供おして。直ふ首里の龍宮城へ冊を入るる路次の警固足拘の群集処せれまでに立続く。綽の為体笑しくぞ見えふるれ。かくハ薫城の配処より。三里よ餘る道程を。その日午の比及ふ首里の都ふ入ふふ。此ゝ先ゞろて知メえしゞ。尚寧王ハ法司。按司。紫巾官の大臣を集合。龍宮城の正殿ふ于て。寧王女廉夫人ふ對面ありゝ。當下寧王女ハ珠を献れよ。尚寧王これを玉几ふ受載しつ。失であるそれ一顆の珠と押並熟視て。利勇ふ仰こえゝり。この珠曩ふ失るりのよ。

りうぐうじやう
龍宮城を
ばくうんじゆ
暴雲珠を
くだ
砕く

ええおがふ。それと定めべて證據るし。卿ホいるまえつると同ふ利勇膝
をそゝめて。ちゞし珠をうち瞻て。臣ホが愚眼をのそそれハ此度王女の
進らせまの珠も敗ハ似とゆへぞも。彼と是と比るふ。些の書をあり。
よくく鑒定めくまほし。といふその言語いまぎをうべび。中婦君扉
風の後より遶り出て。尚寧王ふおうけかう。殿下の珠の真偽ハ
ちくんとおぼふへ曚雲國師ハ道高く權智不側の術あり。
かならぶび疑を決しまうんと。信ぶらて逢ふ高嶺のもと伏拜めハ且
て曚雲を雲ふ駕。風ふ御。飄く然と飛まりて。庭上おまり。王これを
見て。香炉焼。ごうく起く高ゆのはうに招請し。さて珠のまの偽
を同ふ。曚雲おごて。二顆の珠をとえからえく冷笑ひ。目今王女ハ贋
らしまふへ。疑ふべくもめくね贋物なり。これ御覽せよ。一顆ハ潔白
ふして。一顆ハ書し。書ハ帶されハ蛇の珠なり。蛟の珠ハ打ども砕そ蛇
の珠ハ毀ふとしいでや試こゆんと。
行ふ書あるハ一打ふて微塵ふなりて飛散り王これをえて。懶
然と笑を変じ王女贋物をりてる
さく縛めよ。といきほさらへハ王女ハいひとく言語もあく。只手伏し
てゆるそふぞ。ねがひ廉夫人ハ。その悦を多ふ貢く。贋物と
ちり付くばいうで漫ふ進らそべれ。それもゐ悟しと抛がさべつへハ
を斬も殺しもえく。王女を放しまうひねと注賠話ふ会釈もおく。
利勇ハつと列をとなれ王女母子を引おろさんとて勢ひ猛く走り蒐る
ハ毛國将推隔てく。倩とふらまへ某今一言あり。君命なりとも且く
まをとゞめて。衆ゆへ夫聖王賢臣ハ偏をりて偏とせぞ。只ふを

もく宝とす。父あれが子あり。夫婦と君臣とうへてこれを三綱と号く。仁義礼智忠信孝悌の八のそのも三綱正しからざれば行はれず。父子相親君臣相責夫婦相恨てよく邦家を治るものへこれあらざれば。殿下今一顆の珠を惜て世子を罪ものうず。珠ありといふとも。誰かこれを徳とせん。国の存亡をあらそ。珠のよくこれ不ありて戦せ輸く寇を退るんや。慈悲の聖断只この殿下珠をすて戦せ輸く寇を退るんや。慈悲の聖断只この一挙みあり。偏に免許の制度を廃我ところなうと怒る眼より涙を含て声高ふうに諷諫とそのいふ所理なれば王頻に嘆息して。瞽雲ふ對とし。王女罪あり。これを誅せんやと。瞽雲衣の紬かれ合し。父子の道は天性なり。よそもあしとも他人の中言ひ容

もそ。賞罰は君の柄ころふあり。なんぞ縦罪ありとも刑戮人臣とおもひを正しくせんとなさんや。今より王女を廃して別に世子を立たまへ。貧道つつしく王女が相をみふ。才餘あれども徳薄し。その命運人君となること能はじ。亦中婦君が相さるにおよばじかるべふ。恩愛久が捨て法二三年の間あり。かならず懐胎のひて王子降誕ましまさむ。その時ふ失ふれ珠も索めずとも自ら還るべし。と言が如く。ふもうせしかば王ふく訝びて。又毛國押をちくく召さ」王女廉夫人が罪犯ふくぞといへども。格外の制度をりて。これを省め彼ホ邸卿ふ預なり。中城へ移てなりて閉居ふへと仰をれば毛國押喪ふ泣沈このひとれ。王女と廉夫人を扶起をに寧王女は今

さふにつぶ〳〵を責て父王の御ん慈愛の有がたく忝〳〵なみも再びまみるよしぞなき王宮もけふを限りうとい〳〵と名残のをけどバ立難きふぞ理なるかくて王女廉夫人ハ毛國掛ふ誘引ま。中城へ入りひつ配処よ在そるふハ似ぞ給るそるものハ真話ぶ絶ぬりのそひふ。うち頻てぞせし利勇と謀一合し。只管ふ曚雲を信ーて腹ふの機密な憑こゝ女え他るものこれを欺待ちどに曚雲へその身高嶺ふあり。るがふ荒行ーて常ふ首里ふ往来ー何よまれ。妙のが欲とそふの神通をりて理なく棄ひろりまけまと國王の師とそるこゝふ異人なれバ崇を怕ま〳〵訴告りのもし是ふよりて。先王の君政まもなく荒まて。徳を含むりのいとまる。そうれふ中婦君ハ。暴ふそうふびも。寧王女ふ珠をうしなひて。憎ーとそふ廉夫人さ人配流人とをしまれふ。此度失そる珠を索ぬく。件の母子ゆりのふよし笑そーびこうそ。お放ぴぬまびふ目上ふ痛の歩ふんやうふくと。せんかせんと。そひくまれふ。その珠ハ貴物ふて王女ふまびーかがこの便宜よ結果んりのふとて曚雲ふ注目せしよ曚雲ハその意をるがふ却て王女と廉夫人を救ひて悪ふ中城へかんーまあふせまれバふうく〳〵を失ひつ傷ふ人なれ折をまく曚雲ふうち恨こ國師ぬどて毛國掛ふかん人しーて。王女母子ふ久ー〳〵まひまれ豫ふ憑ふメえしみ。いとひびほし。とそふ所あふぴして。彼母子を救ふべやや寧王女ハ聰明叡悟ふまく。





國民又〳〵その純孝を稱せ。ゐるれを今。玄地ふこれを殺さゞ。國民これを悼こ中婦君の姑ゐよろく。寛枉ふ階さ玄とゐへう。といん。民の志を奪ふとれへ大事なゞし。王女恙みく中城へゆるも。世子と稱そるるゆを羽ざれへ怕るに足ゞん。加之り中婦君のもん腹ふ王子誕生はゆさゞ。王女百年の壽を有とも。毛國畀もせんそべみうくん。向ゆもしくるごく。中婦君ふへ子ありそべうゐる君王虛弱よはしませば。石女ゐて果のふそゆ。いと惜ゐべきうゆそや。ゐい七七四十九玄して陰道閉そ。いまゞ丁のもん年なれば子を生んとも又生下とも。そへ位そうふあるべてなりと密語ゐゞ。中婦君烏ゐて。遂ふ利勇と密通し。只管に子ゆ產んとて晩玄とも。年月のこらづゐ代謝そく終〳〵孕どゞさてへ利勇ゐも子淵なかりけりとて貴賤をえらまび。矢目よれ少年ゆ呼び入玄して。後宮ふ養ひ。その淫ゞしれる。晉の賈后が荒淫ゆも勝るゆ。尚寧王へつやく覺ゞ。利勇をほそ〳〵權威を振ひ。母のれゐ諂のへ功なれをも賞し剩曩ゐ北谷を追放せられ。阿公をも。都近く住居さしてゆの乏〳〵持そろ。涉はしとゐもおろゝなれゞし。

椿說弓張月續編　卷之三　畢

齋戒錄